

非致死性トラウマ体験後のコーピングと意味づけが PTSD および PTG に与える影響

日比 麻記子

(明治学院大学心理学部心理学科)

(学籍番号：18PS1127, 指導教員：森本 浩志 准教授)

キーワード：コーピング, 認知的評価, 意味づけ, PTSD, PTG

問題

心的外傷後ストレス障害(PTSD)とは、実際にまたは危うく死ぬ、重傷を負う、性的暴力を受けるなどの出来事を、直接体験する、あるいは目撃する致死性トラウマ体験によって、侵入症状・回避症状・過覚醒症状・認知と気分の陰性変化などの心的外傷後ストレス反応(PTSR)を呈する障害である(American Psychiatric Association, 2013)。一方で、人間関係上の問題や学業・職業上の重大な挫折経験のような非致死性トラウマ体験でも、致死性トラウマ体験と同程度の PTSD が生じることが示されている(Mol et al., 2005)。トラウマ体験者の中には、トラウマ体験に対するもがきによって認知的枠組みを再構成することにより、人間としての新たな可能性や強さを発見し、心的外傷後成長(PTG)を経験する人もいることが指摘されている(Calhoun & Tedeschi, 2006)。

PTG をもたらす「もがき」に関連する研究として、Lazarus & Folkman (1984) はストレスの認知的評価理論を提唱しており、ストレッサーへの対処方略として認知的評価およびコーピングを挙げている。コーピングについては、気ぞらし(別のことで気を紛らわすこと)、回避認知(出来事について考えないようにすること)、回避行動(出来事に関連する場所や人物を避けること)、相談・告白(出来事について打ち明けて相談すること)が PTSD の維持に寄与することが示されている(上野・佐藤, 2014)。しかし、コーピングと PTG との関連については明らかになっていない。認知的評価については、統合的意味づけモデル(Park, 2010)と二重表象理論(Brewin, Dalgleish, & Joseph, 1996)が提唱されている。統合的意味づけモデルでは、出来事に対する意味づけの過程を経て、生成された意味が得られる。二重表象理論では、自身の世界観を踏

まえた意識的な意味づけにより、言語的記憶が得られる。したがって、非致死性トラウマ体験に対するもがきにおける認知的評価では、意味づけの過程を経て言語的な意味記憶が形成されると考えられる。肯定的な言語的記憶はストレスに起因した自己成長感をもたらすことが示されており(宅, 2005)、否定的な言語的記憶は PTSD と正の相関、PTG と負の相関が示されている(小田部, 2011)。

以上の知見より、非致死性トラウマ体験に対するもがきにおいて、トラウマ体験についての肯定的意味づけは PTG を高め、否定的意味づけは PTSD を維持し PTG を低めると考えられる。また、トラウマ体験後のコーピングは、PTSD および PTG を高めると考えられる。しかしながら、これまでの研究では非致死性トラウマ体験に対するコーピングおよび認知的評価と、PTSD および PTG との関連は包括的に検討されていない。

目的

本研究では、非致死性トラウマ体験後のコーピングと意味づけが PTSD および PTG に与える影響について、以下の仮説を検討する。

仮説 1：肯定的な意味づけは PTSD と負の関連、PTG と正の関連が見られる。

仮説 2：否定的な意味づけは PTSD と正の関連、PTG と負の関連が見られる。

仮説 3：コーピングは PTSD および PTG と正の関連が見られる。

方法

調査対象者

首都圏内の私立大学に通う大学生 87 名および株式会社クラウドワークスに依頼して募集した学

生と社会人 400 名を対象に、web 調査を実施した。回答に不備のない 350 名(男性 120 名, 女性 226 名, 不明 4 名, 平均年齢 35.06 ± 12.04 歳)のデータを分析に用いた。

測度

- ① デモグラフィック項目: 性別, 年齢
- ② 非致死性トラウマ体験の内容: 非致死性トラウマ体験チェックリスト(佐藤・松田, 2017)
- ③ 非致死性トラウマ体験からの経過月数
- ④ 非致死性トラウマ体験の継続性
- ⑤ コーピング: コーピング尺度(上野・佐藤, 2014)
- ⑥ 意味づけ: ストレスに対する意味の付与尺度(宅, 2005)の下位尺度「ポジティブな側面への焦点づけ」・「日常型心の傷」の記憶表象尺度(小田部, 2011)の下位尺度「言語的記憶のネガティブ度」
- ⑦ PTSD: 改訂出来事インパクト尺度日本語版 (IES-R) (Asukai et al., 2002)・非致死性トラウマ体験後の認知尺度(CINT) (伊藤・鈴木, 2009)
- ⑧ PTG: 日本語版外傷後成長尺度 (PTGI-X-J) (Tedeschi, Taku, & Calhoun, 2017)

結果

相関分析の結果, 肯定的意味づけは PTG と有意な中程度の正の相関が見られ($r = .42, p < .01$), 否定的意味づけは IES-R($r = .39, p < .01$)および CINT($r = .54, p < .01$)と有意な中程度の正の相関が見られた。コーピングのうち, 相談・告白は PTG と有意な弱い正の相関が見られた($r = .42, p < .01$)。回避認知および回避行動は IES-R の回避症状と有意な弱い正の相関が見られ(回避認知: $r = .29, p < .01$, 回避行動: $r = .40, p < .01$), 回避行動は IES-R の合計点と有意な弱い正の相関が見られた($r = .30, p < .01$)。

肯定的意味づけ, 否定的意味づけ, コーピングを説明変数, PTSD, PTG を目的変数とする共分散構造分析の結果, 十分な適合度は得られなかった(GFI = .86, AGFI = .75, CFI = .86, RMSEA = .12)。肯定的意味づけは PTG と正の関連($\beta = .35, p < .01$)が見られた。否定的意味づけは PTSD と正の関連($\beta = .37, p < .01$), PTG と負の関連($\beta = -.12, p < .05$)が見られた。コーピングのうち, 気どらしは PTSD と正の関連($\beta = .17, p < .01$), 回避行動は PTG と正の関連($\beta = .22, p < .01$), 相談・告白は PTSD($\beta = .18, p < .01$)および PTG($\beta = .35, p < .01$)と正の関連が見られた。

PTSD について, 肯定的意味づけは相関分析・共分散構造分析ともに PTSD との関連が見られなかったが, 否定的意味づけは相関分析・共分散構造分析ともに PTSD と正の関連が見られた。これらの結果から, 非致死性トラウマ体験を否定的に捉えていた人ほど PTSD がより強く維持されることが考えられる。コーピングは, 相関分析では回避認知および回避行動が回避症状と正の相関, 共分散構造分析では気どらしおよび相談・告白が PTSD と正の関連が見られた。これらの結果から, 非致死性トラウマ体験直後に回避的なコーピングをしていた人ほど回避症状がより強く維持されることが考えられる。相談・告白と PTSD との関連については, ソーシャルサポートの認知による影響が考えられる(上野・佐藤, 2014)。

PTG について, 肯定的意味づけは相関分析・共分散構造分析ともに PTG と正の関連, 否定的意味づけは共分散構造分析において PTG と負の関連が見られた。これらの結果から, 非致死性トラウマ体験を肯定的に捉えていた人ほど PTG が高くなり, 否定的に捉えていた人ほど PTG が低くなることを考えられる。コーピングについて, 相関分析では相談・告白が PTG と正の相関, 共分散構造分析では回避行動および相談・告白が PTG と正の関連が見られた。これらの結果から, 非致死性トラウマ体験直後に相談や告白, 回避行動をしていた人ほど PTG が高くなることを考えられる。回避行動と PTG との関連については, トラウマと向き合うことが人生において重要であるかを改めて考え回避する必要性を認識し, 自ら積極的に回避することが PTG を高めると考えられる。

本研究の限界として, 横断的研究であるため明確な因果関係を結論づけることはできない。また, 体験当時のコーピングと意味づけについて回顧的に測定したため, 想起バイアスによる影響が考えられる。今後は, 体験直後および一定期間後に縦断的研究を行うなど, 更なる検討が必要である。

引用文献

- 上野 大介・佐藤 健二 (2014). 大学生における外傷後ストレス反応の改善に受容コーピングが及ぼす影響 徳島大学人間科学研究, 22, 11-20.